
魔人剣

ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔人剣

【Nコード】

N4310B

【作者名】

ゆつき

【あらすじ】

主人公の父ライトは主人公が幼かった頃失踪した。その父を探すため主人公は旅に出る。

第一話 見知らぬ男達

魔人剣

「父さん何処行くの!？」

「俺は行く。新たな力を求めて」

「・・・帰ってくるの？」

「・・・分からない」

「すまない・・・もう時間だ」

「父さん？父さん！？父さーん！」

「ナイト・・・強くなれ・・・」

第一章 見知らぬ男達

俺はあの日の夢に魘されていた。

もう15年も前の話だ。

俺の父は俺が6歳の頃「強くなれ」と言い残して消えた。

その日以来、父に会うことはなかった。父の消息さえも知らなかった。

母はいなく父に育てられてきた。

父と俺は木こりとして森の中の小屋に住んでいた。

父が失踪した後、俺はその小屋を出て、違う小屋を持った。そんなある日のことだった。

ゴンゴン

家のドアの音がした。

俺は驚いた。

俺の家には来客は来ることはほとんどなかった。あったとしても小屋が比較的近い家の人だった。だから俺は嬉しかった。

俺はドアを開けた。

「すみません」

と言ってきたのは顔といい、声の太さといい、台詞が一致しないような男どもだった。

男どもの背は高く牛の皮のようなボロボロの服を着て、顔中キズだらけだった。

俺は特に動揺することも無く返事をした。

「なんでしよう、どうぞ上がってください」

俺はお茶を出して「なにか用件でもありますか？」と聞いた。

「ケイン・ライト様をご存知あるでしょう」

俺は驚いた。ケイン・ライトとは俺の父の名だったからだ。

遂に父さんの情報を手に入れた。

俺は少し強気で言った。

「俺がケイン・ライトの息子ナイトだ。それよりあんた達は何者だ？」

すると今度は男達が動揺した様子だった。

男達はなにやら言いあっていたが遂にリーダーと思われる男が怒鳴った。

「おい！おまえ達！ライト様の息子様のだぞ！頭をさげんかい！」
すると男達はいつせいに頭を下げた。

俺は何のことかさっぱり分からなかった。

「これはいったいどういう事だ？」

さっきの男が口を開いた。

「ではお話致します」

「私達がなぜここに来たか、私達とライト様はどういう関係か」

第二話 魔人剣

男達は話し始めた。

「ライト様は英雄でした。ライト様は当時「力」を求めていらつしやった。

私達は昔ちよつとした「賊」として暮らしていました。私達は財宝探しなどしてまあ「トレジャーハンター」といったところでしょうか・・・

そして私達が次の財宝の目処を付けて次の財宝を探しに行く道中のことでした。

砂漠を歩いていて。そして私達はライト様に出会いました。そしてライト様は私達を見てこう言いました。

「お前達、力はあるか？もし無いのなら私と共に力を手にしよう」と。私達は当初何をふざけたことを言っているんだ？と思い皆で倒しにかかりました。しかしその時でさえライト様は人間とは思えぬ強さで私達はボロボロにされました。

私達とはどめを刺される！と思いました。「敗者は死ぬ」というのが当然だと思っていましたから・・・しかしライト様は再びこう言いました。「お前達。力は欲しくないか？私と共に力を手にしよう」と。おっしゃった。私達は動揺しましたがライト様に従うことにしました。しかしライト様は「力」が欲しいと言うだけで、そのほかには一切話をされなかった。しかたがないので私達はその地方に伝わる伝説の話をしました。

「魔人剣」という伝説の剣の話を・・・しかしライト様はその話にかなり興味をお持ちになったのです。

私達も冗談半分で言ったもので・・・

ですから私達は「魔人剣」に関する話をしました」

・・・俺もいっぺんに色々な話を言われて内容を飲み込めなかった。ただ、どうしても聞きたいことがあった。

「父さんは・・・生きているのか？」

男達は黙り込んでしまったがやがてある男が口を開いた。

「ライト様は・・・亡くなりました・・・」

予想は出来たことだ。それほど驚くことではない。

「じゃあさっきの話の続き「魔人剣」について聞かせ欲しいのだが」
「かしこまりました」そういつて男は軽く頭を下げた。

第三話 雷牙の剣

前回までのあらすじ

主人公ケイン・ナイトの父親はナイトが幼き頃失踪してしまった。そんなナイトの家に突然謎の男達が尋ねてきた。

その男達はどうやら父ライトの事を知っているらしい。

ナイトはその男達から魔人剣という剣の話を聞いた。そして・・・

男達が話の続きを語りだした

「そもそも魔人剣は言い伝え程度のものでしたから詳しくは知りませんでした。

しかしそれでも話を聞きたいとライト様は言ってきたので、私達はその言い伝えを話しました。

その昔「雷牙」という伝説の勇者がこの世界にある剣を落としたのです。

それが「魔人剣」という事です。その剣はとてつもなく膨大な力を持っていました。

その剣の偉大なる力を求め世界中のものが魔人剣を探しました。しかし見つけることは出来なかった。誰一人として見つけれなかった。しかしその魔人剣を見つけたのがライト様です。

北の国「サイガ」に剣はあったのです。ライト様はおそろおそろ剣に触られました。

そして遂に魔人剣を手にしたのです。魔人剣を手にしたライト様は、村を荒らす盗賊や山賊を倒しました。

時には村人を襲うドラゴンも倒しました。ですからライト様は国中の皆から尊敬されていました」

俺は疑問に思った事があったから聞いた。「・・・別に父さんは強くない。木こりではあったけれど・・・ドラゴンなんか倒せる力な

んてありえない。それよりあんたの名前を聞いていなかったが・・・

「男は急いでこう言った「申し訳ありません私はジャント・セーンで
ございます」

丁寧語を使うのがあまり上手ではないらしい。

「それで父さんは何でそんなに強くなったんだ？それが魔人剣の力
なのか？」ジャントはフォームと言って答えた「当たらずとも遠から
ずですな・・・それは魔人剣が進化するからです」

（し・ん・か！？）

「剣が進化するなんて考えられない。ありえない事だ」ジャントは
頭を下げ「すいませんです。一度に色々な事を言ってしまいました
驚いてると思いますが、順番に話していきましょう」

・・・いったい何がどうなっているんだ？俺には理解できなかった

第三話 雷牙の剣（後書き）

はい。はじめまして作者のユウキです。今回後書きしたのには深い意味はありませんが、読者様に魔人剣の裏話？を語っていいこうと思っ
ています。第一回はナイトから。ナイト君、当初の予定ではもつ
と汚いしゃべり方だったのです

しかし作成していくうちにもう少し礼儀があってもいいなと思っ
てすこしやさしくなりました「お前↓あんた」とか「聞かせてくれ↓
聞かせて欲しいのだが」とか・・・

そんな感じです。はい。では今回はこの辺で失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310b/>

魔人剣

2010年12月18日15時03分発行